

論文の和文要旨	
論文題目	青海省成立の経緯とその意味 —「チベット」の分断と「中国化」への変遷を中心に—
氏名	周太加（ジュクトルジャ）
本論文は、清末新政中の 1907 年に青海を含む藩部地域を「省制」にすべしとの提案がなされて以降、中華民国の北洋政府を経て南京国民政府成立直後の 1929 年に正式に「青海省」が成立するまでどのように「建省」が展開されたのか、その政治的文化的経緯を検討し、それがどのような意味を持ったかを明らかにするものである。 本研究の課題である青海は、歴史的にチベットの伝統的地域区分であるアムド地方としての顔を持つ。地理的に見ると、チベット、新疆、モンゴルという中国の三大非漢民族地域と、「内地」すなわち漢民族地域とが接触してきた最前線の地域である。また政治的には、チベットが仏教を媒介としてモンゴルや満州との関係を形成する過程で決定的役割を果たした場でもある。しかも 1725 年雍正帝により設置された青海辦事大臣のもとで、長年にわたり文化的に重要な役割を果たしてきたチベット仏教「一強」の青海社会では、東部の西寧を中心に漢人や回民が増え、乾隆年間までに漢訳仏教、道教、儒教、イスラム教なども重視される多様化が進んだ。行政的にみると、清朝の雍正初期まではダライラマ政権のもとで青海ホシュート、すなわちグシ・ハーン一族がチベット全体を統治していたが、雍正帝によるチベットの分断により、アムド地方はその領内に位置する青海湖にちなんで青海と命名された。さらにアムドの東北部が甘肅省に、東南部が四川省に、カム地方は西藏と四川省、雲南省に組み入れられた。このことが青海という行政区画の「基礎」となっただけでなく、それ以降、隣接する行政地域の形成にも決定的な影響を及ぼした。これは現在も続いている中国におけるチベット人居住地の分離の歴史的転換点であるとも言える。 そして清末青海東部に登場した馬一族の経営により「青海省」の原型が形成され、中華民国期の北洋政府を経て南京国民政府のもとで正式に「青海省」が成立した。それ以降も青海はチベット情勢に大きな影響力を持ち続けた。既存の「青海省」に関する研究は、現代中国の民族問題・辺疆問題に関わることから、統治する中国の視点に立つ「中華・漢民族史観」に依る研究がほとんどであり、政治的事件を並べた概説の類を除き、この地域の伝統的文化や政治的性格を考慮し現地の人の視点を取り入れた複眼的研究は皆無といって	

よい。また、青海近代史において清末民国期の研究はほぼ白紙のままである。そのため、「青海省」成立についての本研究は、当該研究領域の空白を埋めることができるばかりでなく、チベット問題や現代中国の民族統合を考える上で、過去の清算のみならず現在の意義をも持つといえる。

本論文は地域研究法、基本的に資料をもとに歴史を再構築する方法を用いて、青海地域の政治・行政・社会構造の議論を年代順に進めながら、文化・宗教の視点も重視する姿勢を取った。

序論では、本研究の目的、動機、内容、課題、研究史、方法、論文の構成等を示した。

第1章では、社会秩序を中心に「歴史的空間」としての青海地域を考察した。まず、青海地域の歴史を概観し、「青海」の定義とその範囲を示した。そしてロブザンデンジンの反乱を機に清朝が西寧に青海辦事大臣を設置したことに焦点を当て、その背景や経緯を検討した。最後に辦事大臣下の社会秩序を「善後事宜 13 条」、「青海番例 68 条」などを通して検討し、これらによって今日の青海省の行政区画の基礎がつけられたこと、ならびに多元的社会が形成されたことを明確にした。

第2章では、20 世紀初頭の「清末新政」において青海に省を設置する案がどのように浮上したかを検討した。19 世紀後半になると、清朝は列強の進出と民衆反乱の対応に追われる中「国家」の再建を模索した。その過程で台頭した漢人官僚が国防上の理由から青海を含む藩部を「省制」にすべきという議論を主導した。その結果「青海省」の設置を視野にいれて、1908 年から西寧府を中心に青海辦事大臣による「試墾」が始動したが、1912 年清朝自身が崩壊したことで白紙に戻ったことを示した。

第3章では、馬一族軍閥の青海における活動を考察し、彼らによってどのように「青海省」の原型がつけられたかを明らかにした。まず、19 世紀後半に起きた甘肅ムスリム反乱の指導者から清朝に投降した馬一族は、ムスリム反乱の制圧で功績をあげたことを機に清朝軍の中で頭角を現したが、清末民初にかけて馬一族がどのような形で青海地方に登場したのか、その要因と背景を分析した。そして、北洋政府期に自ら「近代軍閥」へと変身しながら、清朝時代にアムドを青海辦事大臣とカムを四川など分断定めた境界線を青海馬一族色の濃い独自の青海を創生する際にどのような政策を行ったのかを考察した。最後に「西藏」との関係、「玉樹境界」問題、ラブラン寺院事件を中心に馬一族と周辺の諸勢力との関係を考察した。

第4章では、中華民国期の軍閥混戦の複雑な状況のなかで「青海省」がどのように成立したのかを検討した。まず、孫文ら革命派と袁世凱との「五族共和」に対する反応を中心に、中華民国政府の青海に対する態度を概観した。次いで、馮玉祥の西進と馬一族との関係について検討し、馮玉祥の閻錫山、蒋介石との対立の中で、彼らが勢力均衡を図る地域再編の名義の下で青海省が成立され、馮玉祥の部下の孫連仲が青海省の初代省長なったことについて考察した。最後に「青蔵戦争」「孫殿英事件」反共抗日と「六大中心工作」等を中心に蒋介石・南京国民政府と馬一族の権力をめぐり複雑に絡んだ関係を分析し、日中戦争が勃発したことを受け首都が南京から重慶に移され、地理的に近くなったこともあって中央からの影響力がそれ以前よりは強くなったけれども、全体的にみると南京国民政府期青海では馬一族の下で「高度な自治」が維持されたことを提示した。

第5章では、「青海省」の成立がもつ意味とその影響について考察した。まず省の成立によって青海はどのように変わったのかを明らかにするため、アムドと伝統的に重なる青海の統治構造がチベット全体の中でどのように変っていったかを検討した。そして、青海では省成立後県庁が置かれて内地化が進み、それに伴う近代化政策によって漢化しつつも、馬一族がムスリムであったことから、多民族が「共存」できる社会であったことを示した。

結論では、これまでの議論をまとめたうえで、在地民族の固有の文化、生活様式を容認する統治姿勢が必要であるとするならば、その点において清朝、馬一族軍閥には一定の評価が与えられるべきであるとした。また、近代化と多民族の「共存」が両立するためには歴史を研究しそれから多くのヒントをもらわなければならないが、本研究はこのための一つの試みであると研究意義を再確認した。

以上の研究を踏まえて、本論文では青海省の成立プロセスを歴史の流れに沿って検討し、青海地域をめぐる問題を出来るだけ宗教文化と政治思想の両面から考察すべく、宗教的活動には政治的な意図を、政治的活動には宗教的な意味を見いだそうと努めた。そして青海地域をめぐる問題に対して、現地と「中央」たる中国および国際的な視点に立ち、歴史的事実と歴史資料に基づいて実証的考察を行った。